小野蘭山（らんざん）と『本草綱目啓蒙（ほんぞうこうもくけいもう）』

小野蘭山は、江戸時代の多数の本草学者のなかで第一人者とされる人である。また、その著述した『本草綱目啓蒙』は、江戸時代の本草学の最大の達成と評価されている。蘭学の影響を受け、内容の検討や理解が進むに連れ、中国の本草学である『本草綱目』を基本としながらも、我が国の動植物を加えたものとなっている。わが国の本草学上これほどの著述は無二であり、

「水火、金石、草木、鳥獣、蟲魚ノ各ソノ生産形状、良毒、其外和名異名等、一々洩サズ、精詳ニ辨晰セラレタレバ…」と評された。

小野蘭山（一七二九～一八一〇）は、享保十四年（一七二九）京都で生まれた。一六歳で儒者松岡恕庵（一六六八～一七四六）の門に入った。京都河原町の借家に住み、そこで衆芳軒と名づける塾を開いた。蘭山は他家に仕えることなく、医師にならず、もっぱら家塾で弟子に本草学を教授し、弟子からの謝金のみによって生活を立てたのである。彼の名声は次第にあがり、梁の陶隠居や明の李時珍にも比せられるほどで、弟子も千人にのぼったという。寛政十年（一七九五）七一歳のとき、幕府の要請にしたがって江戸に出た。主な任務は、医学館において『本草綱目』を講義することであった。これに加えて、薬草園の管理と各地に採薬に出かけることであった。文化七年（一八一〇）八二歳で亡くなるまで約十年間、医学館での講義を続けたのである。

蘭山の孫、小野職孝（もとたか）は、蘭山が江戸に出るとき蘭山にしたがって江戸に出て、夫婦で蘭山の日常生活の世話をした。職孝が蘭山の講義を筆記し、蘭山がそれに考定を加えて『本草綱目啓蒙』と題して出版した。出版は蘭山が七五歳の享和三年（一八〇三）に始まり、全四八巻二七冊が完全に出版されたのは文化三年（一八〇六）であった。